
私の知らない物語を

mura-saku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の知らない物語を

【Nコード】

N2851I

【作者名】

m u r a - s a k u

【あらすじ】

旅立つ『君』に送られる、『私』の物語

(前書き)

初投稿になります。他所のケータイ小説サイトにて投稿したものを、改稿して掲載してみました。

よろしければご覧ください。

……あれは、君が3歳の頃だったかな。季節は、夏だと思う。
あの時住んでいた家から、歩いて3分程の近所にあった公園。そこ
にあった小さな池に、小さな君は落ちちゃったね。

私は慌てて君を助け出したけど、君は泣くどころか、満面の笑み
になってはしゃいでいた。おっきなお魚さんに会えた、目が合って
挨拶したって、嬉しそうにさ。

小さな頃から、君はいつも朗らかで明るく、笑顔の似合う女の子
だった。

間違いない。私は、覚えているよ。

あ、そうそう。こんな事もあったなあ……君が7歳の頃、季節は
秋……運動会の日だ。

君は、クラス対抗リレー競走のアンカーで、元気よく腕を振って、
頑張って走っていた。誰よりも速く、1番にゴールへ向かって。

けど、あと数メートルでゴールっていうところで、こけちゃった
んだよね……君のすぐ隣のコースを走っていた子が。

そう。覚えてるかな？

君は全く迷う事なく、レースに負ける事も気にせず、その子を助
け起こしてあげたね。そして、一緒にゴールまで、ゆっくりと歩い
ていった。

あの頃から、君は勝ち負けよりも大切なものと、優しさを持ち合
わせていたんだよ。

これも、私はしっかりと覚えている。家のビデオにも、残ってい
る筈だ。

多くの人から拍手や喝采を浴びてゴールする愛娘の姿に、私は感
動や誇りというものを、多分生まれて初めて覚えていたよ。

忘れられる、筈がない。

それと、あれは君が11歳の頃……2月に入って、1番寒い日の朝だった。

はい、と言つて、君ははにかんだ笑みを浮かべながら、前の晩にお母さんと一緒に作ったチョコレートを私にくれたんだよ。

嬉しかったなあ。多分、あれが初めて君からもらった、贈り物だと思つ。

本命じゃなかったのは、ちょっと残念に思つていたけど……大人げないかな？

あの頃から、君は少しずつ女性らしさを身につけて、細やかな気配りを持つようになり、お母さんの家事をよく手伝う様になつていたね。

これも、間違いない。頭と、舌が覚えている。実は、私にはちょっと甘すぎたんだ、あのチョコ。ハハハハ……それでも、私の中では世界で1番おいしくて、素晴らしいお菓子だった。

そして、17歳の秋……うん、君もよく覚えているか。

君は、私と口を聞いてくれなくなったね。

最初に、年頃の女の子にはよくある事だつてお母さんと話し合い、私は静観する事にした。そういうものなんだろうつて、割り切ろうとしてさ……まあ、かなり難しかったけど。

約1週間、だったかな。とても、辛かった……何故と、すぐに、いつも問いたかった。お母さんが常に察して、気遣い、止めてくれないければ、そうしていただろうね。

でもね、3日目ぐらいにふと思えたんだ。

黙られた方は、辛い。けど、黙る方も楽じゃないだろうつて。煙たがられはしても、ほとんど毎日顔を合わせる家族だから。

どんなに煙っても、隔たりまでにはならないんだ。

そう思いつけて、私は我慢出来た。そうしていると、1週間はあつという間だったね。

そして、君は少しずつまた話をしてくれるようになり、ひと月も経つとそれまで以上に話し合うようになっていて、私は感じたよ。

あの時、君は人を嫌う事の辛さや、痛みを学んでくれたんだって。辛くとも、あの時間はとても貴重なものだったんだよ。

間違いなく、今もそう思っている。

ああ……20歳の君は、さすがに思い出すまでもなく、頭にすぐ浮かんでくるよ。

ちらちらと白雪が降る肌寒い中、君はお母さんから譲り受けた振袖を着て、成人式へ出かけたんだ。

あの時、いつもの笑みと元気な言葉を残して玄関から出ていく、君の艶やかな後ろ姿を見て、私はまた感じていた。

ああ、この子も大人になった。母親の姿が、ぼんやりと見えてきたなつて、ね。

それまで娘としか見えていなかったのに、あの瞬間から1人の女性として、いずれ母になる君を意識する事が出来て……私は、ただ嬉しかった。

そこまで女性として、旅立ちが見える姿までしつかり育てられた事に、私は自分やお母さん、そして君の事を、とても誇らしく思っていたんだ。

あの瞬間を、私は忘れられない。

……でもね？

私が今までの人生で1番嬉しかった、最高の瞬間は、間違いなく……君が生まれた瞬間、1番最初の出会いだよ。

23年間、君の顔を見ない日はほとんどなかったけれど、いつも頭の中では、生まれたての君と今の君を、並べて見ていた。今も、ね。

ああ、あの小さな天使はここまで成長してくれたんだ。これからは、どんな成長をして見せてくれるのだろう。ずっと、私は君に思い描いてきた。

今日のような、ちょっと悲しいけれど、また最高の瞬間までを。

長くなっただけけど……結婚、おめでとう。

お、おいおい。なんで、君が泣くんだ。式は、これからののに……あ、お母さんまでっ！

それは、私の役割だろう？ 盗ってくれるなよ、ハハハ。

……うん。君の顔を、これからは毎日見れないのは、寂しい限りだ。私の中にある君との物語には、君の笑顔を見守る日々ばかりが描かれている。

それが途切れるのは、素直に、残念だ。
でもね？

これからは、君が物語を作らないと駄目なんだ。私の物語に、いつまでもいてはいけない。

かと言って、1人で作りなさいとは言わないよ。君が心から愛しているあの彼との物語を、ゆっくりと、少しずつでいい。描いていきなさい。

そして、たまにでいいからさ……私の知らない、君の物語を聞かせておくれ。

その楽しみがあれば、私やお母さんはそれ程寂しくはないし……ずっと、幸せだよ。ああ、間違いはない。

さあ、もう行きなさい。主役が準備不足じゃ駄目だ。
また、後でね。

……ああ、もちろん。

私の物語は、幸せで満ちていた。

(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2851i/>

私の知らない物語を

2010年12月31日02時41分発行